中学受験の歴史を、テーマでつなぐ物語

白紙の年表 2

よこ糸の巻

※歩の物語の続きです。できれば1冊目『白紙の年表』を読んでから、どうぞ。



米、水、お金、仕事。一本の糸をたどると、歴史がつながる。

670語	全32話	64点
物語の中で覚える用語	テーマごとに縄文から現代へ	場面イラストつき

各話末に歩の手帳　小3までに習わない漢字はすべてふりがな／小4から一人で読めます

自学自伸教材開発ラボ

この本について

この本は、『白紙の年表』の続きの物語です。

一冊目で、中学三年生の守谷歩は、祖父が遺した十メートルの年表に吸いこまれました。そして、旧石器時代から今の時代まで、すべての時代を、その時代に生きる子どもの体に入って見てきました。歩は、歴史を「順番」として、たてにつなげることができるようになりました。

二冊目の今回は、同じ年表を「よこ」に読みます。米、食べ物、水、お金、道、文字、戦争。一つのテーマを糸にして、古い時代から今の時代までを、一本でつなげていく物語です。この本だけでも読めるように書いていますが、歩の物語の続きなので、できれば一冊目を先に読んでください。

中学受験をする人へ

私立中学校の入試問題（二〇二二年度から二〇二六年度まで、百回分以上）を調べると、歴史の問題には、はっきりした特ちょうがありました。

- 絹、お金、水、紙、災害のように、一つのテーマで古い時代から今までをつなぐ問題が、いちばん多く出ています
- 一つの土地の歴史を、時代を追って問う問題も、よく出ています
- 初めて見る資料（昔の文章、絵、地図、グラフ）を読んで、「なぜ」を考える問題が出ています
- 世界の歴史だけを問う問題は、ほとんど出ていません

この本は、この形に合わせて作っています。

この本の読み方

- 一つの話で、一つのテーマの糸を、古い時代から順に渡ります
- 話のとちゅうには「資料の扉」があります。「ここで、あなたも考えてみよう」の印のところで、本を読む手を止めて、歩より先に考えてみてください
- 最後の「歩の手帳」は、そのテーマの年表です。テストの前に読み返すと、時代のつながりが思い出せます
- 手帳の「並べかえてみよう」の答えは、本の最後のページにあります
- 用語から探すときは、巻末の「用語さくいん」を使ってください。その言葉が出てくる話の番号が分かります
- 小学校三年生までに習わない漢字には、すべて読みがなをつけています。小学四年生から、一人で読めます

もくじ

話	題	糸（テーマ）
第一話	白くほどけた糸	始まり
第二話	一粒の籾	米
第三話	代用の献立	食べ物
第四話	切られた水路	水
第五話	夜をのばす灯り	住まいと灯り
第六話	布の切れはし	絹
第七話	手から手への一枚	お金
第八話	土と火と金	ものづくり
第九話	働くということ	仕事
第十話	峠の向こう	道
第十一話	北へ行く船	海
第十二話	運ぶ人	鉄道と物流
第十三話	帰れなかった人	中国・朝鮮とのつきあい
第十四話	海の向こうから見た日本	遠い国とのつきあい
第十五話	にせものの字	文字と紙
第十六話	昔の人が語った話	祈り
第十七話	絵は、昔の写真	絵と芸能
第十八話	読める、ということ	学び
第十九話	名前と家	女性と家
第二十話	おぼえて、わすれた	暦と時間
第二十一話	都が動く	都
第二十二話	天皇は続き、政治は変わる	幕府と内閣
第二十三話	だれの土地か	土地と税
第二十四話	神にまかせた裁き	きまりと裁き
第二十五話	一所懸命	戦い（古代から室町）
第二十六話	なぜ勝ち、なぜ負けたか	戦い（戦国から幕末）
第二十七話	線を引いた人	地図と境
第二十八話	火事のあとの町	災い
第二十九話	燃やすもの	エネルギー
第三十話	十六歳の夏	戦争と平和
第三十一話	○年前の今日	周年
第三十二話	三坂のよこ糸	終わり

この試読版には、第一話から第三話までが入っています。本では、全三十二話を読めます。題は変わることがあります。

第1話　白くほどけた糸

問題用紙の三行目で、鉛筆が止まった。

十二月十八日。冬休みまで、あと一週間。机の上には、県立高校の入試の過去問が広げてある。残りは社会の、最後の一問だけだった。

——絹は、日本の歴史の中で、どのような役割を果たしてきたか。三つの時代をあげて説明しなさい。

僕は、その一行を、三回読んだ。

わからないわけではなかった。むしろ、見えすぎていた。

湯気の立つなべの中で、白い繭がころころと回っている。指先を赤くした女の子たちが、細い糸を引き出している。長い工場の屋根の向こうに、煙突が一本立っている。

夏のあいだに、僕はそれを自分の目で見てきた。富岡も、生糸も、横浜の港も、名前だけなら一秒で出てくる。

それなのに、答えを書こうとすると、鉛筆が動かなくなる。

場面は一つずつ、はっきり見える。でも、それぞれが別々の箱に入っていて、ふたを開けても、となりの箱とつながらない。「三つの時代をあげて」と言われると、どの箱とどの箱を、どうやってつなげばいいのかがわからなかった。

時計を見た。もう、十時を過ぎていた。

僕は解答らんを白いままにして、問題用紙を閉じた。

＊

次の日は土曜日で、僕は朝から三坂郷土資料館にいた。

自動ドアは、夏と同じように、一度つっかえてから開いた。中は、セミの声のかわりに、暖房のうなる音がしていた。古い紙とほこりのにおいは、季節が変わっても同じだった。

一階の奥に、収蔵庫の扉がある。秋に佐野さんがその一角を空けてくれて、じいちゃんの年表のすぐ横に、僕の自由研究が飾ってある。夏休みにまとめた「三坂の一万年」の年表だ。

「あら、守谷くん。受験生がこんなところにいて、いいの?」

受付の佐野さんが、めがねを下にずらした。

「家だと、集中できなくて」

「うそおっしゃい。ここのほうが、よっぽど集中できないわよ」

佐野さんは笑ったが、その笑い方が、いつもより少しだけ短かった。

「ちょうどよかった。守谷くんに、言っておかなきゃいけないことがあったの」

佐野さんは、受付の机の下から、茶色い封筒を一つ取り出した。それから、言いにくそうに、収蔵庫の扉のほうを見た。

「春に、収蔵庫を改装することになったの。古くなった壁を、ぜんぶ張りかえるんですって」

「壁を?」

「そう。だから、あの年表――治さんの年表は、はがすしかないって」

僕は、すぐには返事ができなかった。

じいちゃんの年表は、収蔵庫の奥の壁に、紙を何枚もつないで貼ってある。長さは十メートル近い。旧石器時代から今年まで、日本の出来事と三坂の出来事が、全部じいちゃんの手書きで並んでいる。

夏、僕はあの年表の前で倒れて、目を覚まして、それから全部が変わった。

「はがしたら、どうなるんですか」

「丸めて、しまっておくことになると思う。あれだけ大きいと、ほかに飾る場所もないから」

佐野さんは、封筒を僕に差し出した。

「片づけをしていたら、収蔵庫の棚のいちばん上から、これが出てきたの。治さんの字だから、守谷くんが持っていたほうがいいと思って」

封筒の中には、原稿用紙が一束入っていた。

一枚目のまん中に、少し右上がりの字で、題が書いてあった。

三坂のよこ糸

めくると、二枚目は目次だった。

一　三坂の米
二　三坂の水
三　三坂の灯り
四　三坂の絹
五　三坂の銭
六　三坂の市
七　三坂の道
八　三坂の駅
九
十　三坂の火事

三枚目からあとは、全部白紙だった。

目次の「九」のところだけ、何も書いていない。番号だけ打って、その先が空いている。消した跡もない。最初から書かなかったのか、書けなかったのか、それはわからなかった。

じいちゃんが死んで、ちょうど一年になる。

じいちゃんは、最後に何を書こうとしていたんだろう。

*

その夜、僕はもう一度、過去問を開いた。

絹の問題は、やっぱり白いままだった。

あきらめて、机の引き出しから、じいちゃんの手帳を出した。夏の旅のあいだ、ずっと持ち歩いていた手帳だ。表紙は角がすり切れて、ページのあちこちに、僕の字とじいちゃんの字がまじっている。

最後のページを開いた。

十一月に、そこには一行だけ、字が浮かんでいた。じいちゃんの字ではない、丸くて少しななめの字。

――よく歩いた。　　M

その一行を見るたびに、僕は白い空間に立っていた女の子のことを思い出す。ミオ。二十二世紀から来た、歴史の記録係。答えを教えずに、問いばかり投げてくる、少し意地の悪い案内人。

別れぎわ、ミオは僕に聞いた。歴史って、暗記だと思う？僕は「順番」と答えた。ミオはうなずいて、光の中に消えた。

その下に、もう一行、増えていた。

同じ丸い字だった。

——じゃあ、よこに読める？

僕は、しばらく息をするのを忘れていた。

インクは、まだ新しかった。

＊



日曜日、資料館が開くと同時に、僕は収蔵庫に入った。

鉄の棚のあいだを抜けて、奥の壁の前に立つ。年表は、夏と同じ場所にあった。その横で、僕の小さな年表が、少し照れくさそうに並んでいる。左の端に「旧石器時代」。そこから右へ、細い線がまっすぐのびて、いちばん右で今年の日付にたどりついている。

僕は、その線を、左から右へ目で追った。夏、僕はこの線の上を、一つずつ歩いた。旧石器の森から、今の資料館まで。だから、どこに何が書いてあるかは、だいたい頭に入っている。

でも、その日は、何かがちがって見えた。

顔を近づけた。たての線と線のあいだに、うすい筋のようなものが、何本も走っていた。紙の上に書いてあるのではない。紙の中に、髪の毛よりも細い糸が、よこ向きに縫いこまれているのだ。旧石器のあたりから、今年のあたりまで、何本も、何十本も。

その一本が、年表の右下の角から、白く垂れていた。

ほつれた服の糸みたいに、二十センチくらい。

僕は、何も考えずに、それをつまんだ。

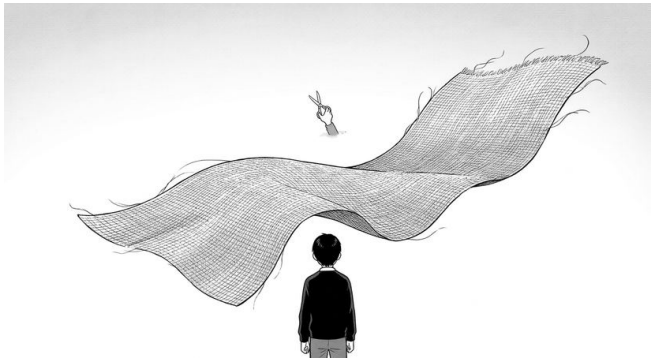
引いた。

するすると、思ったより軽く、糸は出てきた。そのたびに、年表の紙がかすかに波打った。糸が抜けたあとの部分から、ゆっくりと色が消えていく。三坂の欄に書いてあったはずの「製糸工場」の文字が、うすくなる。

年表全体が、布のように、たわんだ。

足もとが、すっと消えた。

＊



白い。

上も下もない、白い空間だった。足の裏には、何かかたいものがあるのに、見下ろしても白しかない。夏に何度も来た、時の狭間だ。

「おそかったのね」

うしろから声がした。

ふり向くと、ミオが立っていた。白い中で、その目だけが、はっきりした色をしている。最初に会った日と、同じだった。

「……ミオ」

「久しぶり、と言いたいところだけど、時間がないの」

ミオは、僕の手もとを見た。僕は、まだ白い糸をつまんだままだった。

「あなたの年表、見えたでしょう。たての線のあいだに」

「糸が、縫いこんであった」

「そう。年表はね、布だったの」

ミオは、空中を指でなぞった。すると、白い空間に、あの年表が浮かび上がった。ただし、今度は紙ではなかった。たての糸が、旧石器から今年まで、何千本もぴんと張られている。

「たて糸は、時代の順番。夏に、あなたが一本ずつ張ったもの」

「うん」

「でも、たて糸だけでは、布にならない。よこ糸が、たて糸のあいだをくぐって、はじめて布になるの。たとえば、絹。弥生の機織りから、明治の工場まで、ずっと一本の糸でつながっている。お金も、米も、水も、道もそう」

浮かんだ布の端のほうで、よこ糸が一本、また一本と、白くほどけていくのが見えた。ほどけたところから、布はたるんで、たて糸だけがむき出しになる。

「よこ糸がほどけると、どうなるの」

「あなたの頭の中で、絹の場面が、ばらばらの箱に入ったままになる」

僕は、ゆうべの過去問を思い出した。

「……それ、もうなってる」

「でしょうね」

ミオは、少しだけ笑った。それから、まじめな顔にもどった。

「よこ糸を取り戻す方法は、夏と同じ。糸の上を、古い順に渡っていくの。一つの糸で、三つか四つの時代をまたぐ。そして最後に、その糸の資料を一つ読んで、『なぜ』を自分の言葉で言えたら、糸の色がもどる」

「期限は」

「春まで。あなたの年表が、壁からはがされる日まで」

ミオは、どうしてそれを知っているんだろう、と思ったが、聞かなかった。この人は、いつも、僕より先に知っている。

「じゃあ、まず――」

言いかけて、僕は自分の指先を見た。

つまんでいた白い糸の、端。

その切り口が、ナイフで切ったように、まっすぐだった。

ほつれた糸なら、端はけば立っているはずだ。でも、これは、ちがう。だれかが、切ったのだ。

「ミオ。この糸、だれかが――」

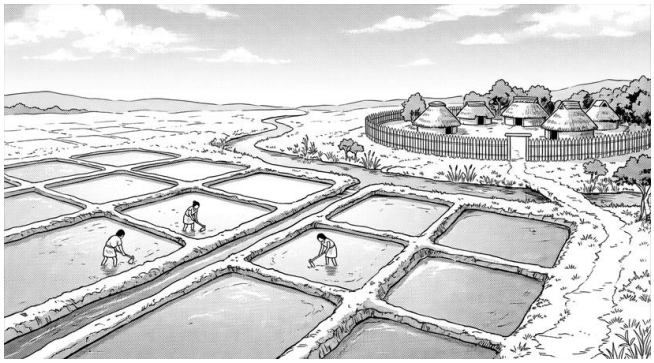
顔を上げたとき、白い空間の遠く、浮かんだ布のいちばん右の端に、何かが光った。

銀色の、はさみだった。

はさみを持つ手だけが、白の中に見えた。その手は、迷うことなく、よこ糸をもう一本つまみ、静かに、切った。

ちょきん、という音が、ここまで聞こえた。

第2話　一粒の籾



土を掘る音がしていた。

ざく、ざく、と木の道具が土に入る。目の前に、小さな四角い田んぼがいくつか並んでいた。田んぼといっても、家の部屋くらいの大きさしかない。あぜで区切られた中に、水がうっすらと張ってある。

僕は、男の子の体で、その水ぎわにしゃがんでいた。手には、木を削って作ったくわ。まわりの大人たちは、田に水を引く溝を、少しずつのばしていた。どの顔も、真剣だった。

「九州の、**板付遺跡**になる場所よ」

ふり向くと、ミオが立っていた。ほかの人には見えていないらしい。

「縄文時代の終わりごろ。ここと、佐賀の菜畑遺跡で、このころの田んぼの跡が見つかっている。日本で、いちばん古い田んぼの一つなの」

「縄文時代に、もう米を作っていたの?」

「米作りは、海の向こうから伝わって、まず九州で始まったの。夏に、あなたが吉野ヶ里で見た景色の、もっと前」

夏に、僕は吉野ヶ里で、米ができて差が生まれ、ムラとムラが争うのを見た。そこまでは、たて糸として覚えている。

「よこ糸は、ここから」

ミオが、田の水を指さした。水面に、白い糸が一本、細く浮かんでいた。

「米の糸よ。さわってごらん」

＊

糸に指をふれると、景色が、少しだけ流れた。

同じ場所だった。でも、田んぼはずっと広くなり、数もふえていた。そして、ムラのまわりに、深い溝がほられていた。僕の背たけより深い。溝の外側には、とがった木のくいが並んでいる。

「さっきから、百年か二百年あと。弥生時代の初めよ」

「この溝は、何のため? 田んぼに水を引くため?」

「よく見て。田んぼのほうじゃなくて、家のまわりを、ぐるっと囲んでいるでしょう」

言われてみると、溝は、ムラ全体を囲んでいた。

「守るため、か」

「そう。こういうムラを、**環濠集落**というの。米ができると、たくわえができる。たくわえができると、それをねらう人が来る。だから、ムラを堀で囲んだ」

米は、作られるようになってすぐに、守らなければならないものになったのだ。

＊

もう一度、糸が景色を運んだ。

足の裏が、ぬかるみに沈んでいく。ひざの近くまで泥につかって、やっと止まった。冷たい。それなのに、頭の上からは、じりじりと夏の日が照りつけてくる。かえるの声が、四方からわきあがっていた。

足もとを見ると、細長い板を、なわで足にしばりつけていた。板が泥の上に広がるから、体が沈みすぎない。**田下駄**だ、と頭のどこかが教えてくれた。

僕は、自分の手を見た。小さな手だった。日に焼けて、指の先まで泥がこびりついている。

――ナエ、そっちの苗は、もっと寄せて植えなさい。

遠くで、女の人が呼んだ。この体の名前だった。ナエ。十二歳くらいの女の子だ。

「静岡の、**登呂遺跡**になる場所。弥生時代の後のほう、今から二千年くらい前」

あぜの上から、ミオが言った。

見わたすと、四角く区切られた田が、ずっと向こうまで続いていた。板付の田より、ずっと大きい。その手前に、屋根の大きな家が何軒か。少しはなれた所に、柱の上に乗った倉庫がある。

米作りは、九州から何百年もかけて、ここまで届いたのだ。

＊

その日の夕方。

ナエの体で、僕は、倉庫の下の地面にしゃがみこんでいた。昼間、母さんが穂をつみとるのを手伝った。石包丁で、一本ずつ。つんだ穂は、倉庫にしまう。食べる分は、臼に入れて杵でついて、もみがらを取る。

ナエは、そっと手のひらを開いた。

中に、籾が一粒あった。

昼間、つんだ穂から一粒だけ、こぼれたのを拾ったのだ。ナエはそれを、口に入れなかった。倉庫にも返さなかった。小さな土の入れ物に入れて、ふたをして、家の柱の根もとに埋めた。

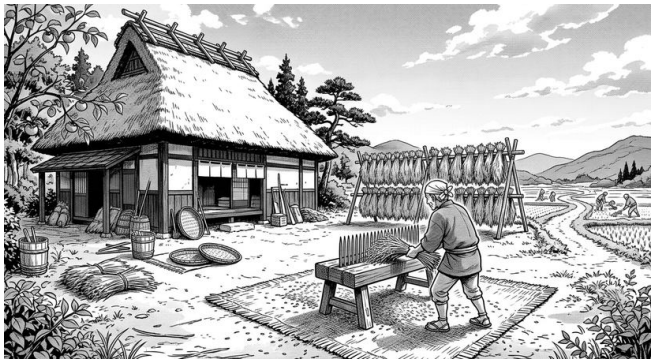
どうしてそんなことをするのか、僕にはわからなかった。でも、ナエの胸の中に、言葉にならない気持ちがあるのはわかった。来年も、この田に苗が立つように。その次の年も。

「その一粒が、この話の結び目よ」

ミオが、静かに言った。

「同じ一粒が、ずっと残るわけじゃない。でも、籾は籾を生む。この一粒の、そのまた籾の、そのまた籾が、ずっと先の時代まで渡っていくの」

＊



次に糸が運んだのは、江戸時代の村だった。

秋の田は、もう刈り取りが終わっていた。家の前の庭で、男の人が、くしのような鉄の歯がずらりと並んだ道具に、稲の束を引っかけて、ぐいと引いた。ばらばらと籾が落ちる。**千歯こき**だ。

その横では、大きな木の箱についたハンドルを、男の子が回している。箱の中で風が起こって、軽いごみやもみがらだけが、口から吹き飛ばされていく。

「**唐箕**。風を起こして、実の入った籾と、ごみを分けるの」

さらに向こうでは、籾の皮をとった米を、斜めに立てた網の上に流して、皮の残った籾と、ふるいわけている人がいた。千石どおしだ。

「江戸時代には、新しい田んぼがどんどん開かれて、こういう道具も次々に工夫されたの。宮崎安貞という人が、農業のやり方を本にまとめたりもした」

「道具が良くなれば、とれる米がふえる」

「そう。でも、それで村が楽になったかどうかは、別の話」

ミオは、村のはずれの蔵を見た。年貢の米が、運びこまれていた。

唐箕を回していた男の子が、手を止めて、ふところから小さな包みを出した。中には、ほかと分けておいた籾が、ひとにぎり入っていた。来年の種籾だ。ナエが柱の根もとに埋めた一粒の、ずっとずっと先の子孫。

僕は、なんだか、胸のあたりが熱くなった。

＊

最後に糸が運んだのは、僕のよく知っている景色だった。

田んぼの向こうに、電柱が立っている。あぜ道を、小さなトラクターが走っていく。昭和の中ごろ、一九七〇年くらいだ、とミオが言った。

田んぼの一枚が、稲ではなく、雑草におおわれていた。そこで、日に焼けたおじいさんが、腰に手を当てて立っていた。

「今年から、この田は作るなと、国から言われてな」

おじいさんは、だれに言うともなく、つぶやいた。

「戦争のあとは、米が足りなくて、作れ作れと言われたもんだ。それが今度は、作るな、だ」

これが、**減反政策**だった。

「どうして?」と僕は聞いた。「米が、足りなくなったから?」

ミオは、答えずに、手を差し出した。手のひらの上に、一枚の紙が浮かんでいた。

◆ここで、あなたも考えてみよう

紙には、折れ線グラフがあった。日本人が一年に一人で食べる米の量の、移り変わりだった。

線は、一九六〇年代の初めにいちばん高くなっていた。一九六二年度の、およそ百十八キログラム。そこから先は、ずっと下がり続けている。

グラフの下に、一行だけ書いてあった。このころ、国は、農家の米を買い上げていた。

「国が、田んぼを減らせと言ったのはなぜか。このグラフから考えて、説明して」

僕は、最初、こう言った。

「米がとれなくなったから」

「グラフを、もう一度見て。下がっているのは、何の線?」

僕は、目をこらした。下がっているのは、とれた米の量ではない。食べる米の量だった。

「……食べる量が、減ってるのか」

「それと、もう一つ。さっきのトラクター、覚えてる?」

機械。肥料。品種の改良。昭和の田んぼは、江戸の田んぼより、ずっとたくさん米がとれる。

僕は、言い直した。

「みんなが食べる米の量は減っていったのに、機械や肥料で、とれる米はふえた。だから米が余った。余った米を国が買い上げると、お金がかかる。だから、作る田んぼを減らすことにした」

ミオが、うなずいた。

足もとの水面で、白い糸が、すっと色を取り戻した。稲の穂と同じ、やわらかい金色だった。

「米は、足りないときも、余ったときも、人をゆさぶる」

ミオが言った。

「弥生では、たくわえが争いを生んだ。江戸では、年貢が村を苦しめた。昭和では、余った米が、田んぼを荒れ地にした。同じ一本の糸よ」

それから、ミオは少しだけ表情をやわらげた。

「でもね、米は、人をゆさぶるだけじゃない。広島には、田植えを、歌とおはやしのにぎやかなお祭りとして、今も続けている所があるの。**壬生の花田植**。世界の無形文化遺産にもなっている。米は、人をつなぐものでもあったのよ」

＊

気がつくと、僕は収蔵庫の床に座っていた。

年表の、弥生のあたりから昭和のあたりまで、金色のよこ糸が一本、縫いこまれていた。三坂の欄の「水田」「新田」「田んぼの整理」という文字が、前よりはっきりして見える。

立ち上がろうとして、棚の下の段に目がいった。

小さなガラスのケースが一つ、置いてあった。中に、黒く焦げた米粒が、ひとつまみ。札には、じいちゃんの字で、こう書いてあった。

「三坂・低地の水田跡　炭化米　弥生時代」

あの一粒ではない。それは、わかっている。

でも僕は、しばらくそのケースから目をはなせなかった。

歩の手帳

米の糸の年表

時代	米をめぐって何があったか
縄文の終わり	九州（板付遺跡・菜畑遺跡）で水田による米作りが始まる
弥生	米作りが広がる。環濠集落（板付遺跡・吉野ヶ里遺跡・唐古・鍵遺跡など）。登呂遺跡（静岡）では田下駄・木の農具
古墳	U字形の鉄の刃先をつけたくわ・すきが使われる
鎌倉	西日本で二毛作が始まる。肥料に草や木の灰
室町	二毛作が広がる。一部で三毛作も

江戸	新田開発。千歯こき・唐箕・千石どおし・踏車。肥料に下肥や干鰯。宮崎安貞『農業全書』。二宮尊徳が農村を立て直す
昭和（戦中）	食糧管理法（一九四二年）で、国が米を管理する
昭和（戦後）	化学肥料と機械で、とれる米がふえる。食べる量は一九六二年度がいちばん多く、その後減る
一九七〇年〜	減反政策（米を作る田を減らす）
現在	二〇一八年産から、国が生産量の目標を配るのをやめる。広島県の壬生の花田植は、ユネスコの無形文化遺産（二〇一一年）

わかったこと

・米は、たくわえになるから、守るものになり、争いのもとにもなった

・道具と肥料がよくなるたびに、とれる米はふえた。でも、それで暮らしが楽になったとは限らない

・足りないときは「作れ」、余ると「作るな」。米のきまりは、時代ごとに逆を向いた

呼び方の橋

・千歯こき ＝ 受験では「千歯扱き」と書くこともある

・臼と杵 ＝ 弥生時代に、もみがらを取るのに使った

漢字で書けるかな

・田下駄　登呂遺跡　環濠集落　板付遺跡　減反政策　唐箕

並べかえてみよう（古い順に。答えは本の最後）

・ア　板付で水田が作られる　イ　千歯こきが広まる　ウ　減反政策が始まる　エ　食糧管理法ができる

ことば

・**プラント・オパール**　稲などの葉の中にできる、ガラスのような小さなつぶ。土の中から見つかると、そこに稲があった手がかり

手帳を閉じようとしたとき、さっきまで白かったページのすみに、じいちゃんの字が浮かんでいた。

——三坂の米。低地の田は、川があふれるたびに作り直された。

そして、その下に、もう一行。

見たことのない、角ばった字だった。

——つながりは、ぜい肉だ。

第3話　代用の献立



台所は、煙と、海のにおいでいっぱいだった。

土間に、大きなかめがいくつも並んでいる。かまどの火が、ぱちぱちとはぜる。僕は、少年の体で、木の札がついた包みを一つずつほどいていた。中から出てくるのは、干した魚、塩、木の実、黒っぽい海藻。どれも遠くの国から、何日もかけて運ばれてきたものだ。

包みの札には、墨で、送ってきた国の名前と、中身の名前が書いてあった。

「平城京の、天皇のための台所よ」

かまどの向こうに、ミオが立っていた。

「阿波国は、今の徳島県。そこから届いたワカメの荷札が、本当に平城京の跡から見つかっているの。天皇の食事のために、各地から届けられた食べ物を、**贄**というのよ」

「税、みたいなもの?」

「近いわね。都にいる人の食卓は、遠くの国の海や山とつながっていたの」

僕は、木の札を指でなぞった。この字を書いた人も、このワカメをとった人も、きっと一度も都の台所を見ていない。

「食の糸は、ここから始まるの」

ミオが、かまどの火を指さした。炎の中に、白い糸が一本、ゆらゆらと立ちのぼっていた。

「それから、もう一つ覚えておいて。平城京ができる少し前、天武天皇が、田植えから稲かりのころまで、牛や馬、犬、猿、鶏を食べることを禁じたの。**肉食禁止令**と呼ばれているわ。仏教の教えのため、とも、米作りを守るため、とも言われている。それから千年以上、この国では、牛の肉を食べることはほとんどなくなっていくの」

「千年以上……」

「その糸が、どこでほどけるか。見ていて」

＊

糸に手をのばすと、かまどの煙の向こうの景色が、すうっと変わった。

広い板の間に、たたみが敷いてあった。鎌倉の、将軍の屋敷だという。奥で、若い男の人が、頭をかかえて横になっていた。

「三代将軍、源実朝。ゆうべ、お酒を飲みすぎたのね」

そこへ、年をとったお坊さんが、小さな茶わんを運んできた。湯気の立つ、緑色のお茶だった。

「栄西よ。中国の宋で禅を学んで、お茶の種を持ち帰ったと伝えられる人。お茶は、体にいい薬だと考えて、『喫茶養生記』という本も書いたの」

実朝は、茶わんを両手で受け取った。ひと口飲んで、少しだけ顔をしかめた。苦いのだろう。

「この出来事は、鎌倉幕府の記録に残っているの。今では、だれでも飲むお茶が、このころは、えらい人が飲む薬だった」

食べ物も、飲み物も、始まりは「薬」や「ぜいたく」なのかもしれない、と僕は思った。

＊

次に糸が運んだのは、潮風の吹く草原だった。

白い牛が、何頭か、のんびりと草を食べていた。今の千葉県、房総半島の山の中だ。

「江戸時代、八代将軍の徳川吉宗が、外国から来た白い牛をここで飼わせたの。その乳を煮つめて、薬にした。千葉県は、ここを日本の酪農の始まりの地としているわ」

「牛の乳も、最初は薬なんだ」

「そう。まだ、ふつうの人の口には入らない」

＊

次は、にぎやかな町の、小さな店の中だった。

座敷のあちこちで、鉄のなべがぐつぐつと煮えている。甘い、しょうゆのにおい。客たちは、なべの中の薄い肉を、はしでつまんでは、うれしそうに口に運んでいた。

「明治の東京。牛鍋の店よ」

「千年、食べなかったのに?」

「明治の初め、牛鍋は、新しい時代の食べ物として、はやり始めたの。そのうえ、天皇が宮中で牛肉を食べたことが知らされて、肉を食べる人がもっとふえた。『安愚楽鍋』という本には、こんな言葉まで出てくるの。牛鍋食はねば開化不進奴」

「どういう意味?」

「牛鍋を食べないやつは、時代に取り残されたやつだ、って」

僕は、思わず笑った。千年の決まりが、たった数年で、はやりの合言葉になっている。

店の外を、ブリキの缶をいくつも持った男の人が、急ぎ足で通っていった。

「牛乳屋さん。牛乳を家まで配って歩く仕事が、このころに始まったの」

薬だった牛の乳が、町の朝に配られるものになっていた。

＊

すいとんの湯気が、顔にかかった。

僕は、小さな台所の板の間に正座していた。目の前のおわんの中で、小麦粉を練ってちぎったものが、うすい汁に浮かんでいる。具は、名前のわからない葉っぱが少しと、さつまいものつるだけだった。

――キヨ。早く食べて、学校に行きなさい。

母さんの声がした。この体の名前は、キヨ。国民学校の五年生。

昭和十九年の冬。ここは、三坂だった。窓の外の通りの向こうに、製糸工場の煙突が見える。でも、煙突から出ているのは、もう糸を煮る湯気ではない。工場は、戦争のための部品を作る工場に変わっていた。

お米は、配給で決まった量しか買えない。それだけでは足りなかった。だから、さつまいもや、小麦粉や、いもの葉を、お米のかわりにする。これを、代用食というのだと、キヨは学校で習っていた。

キヨの母さんは、台所のすみで、一冊の帳面をめくっていた。すり切れた表紙に「献立」と書いてある。毎日の食事を、少ない材料でどう作るかを、母さんは何年も書きためていた。

「その帳面が、この話の結び目」

台所の入り口に、ミオが立っていた。

ミオは、帳面とは別の、薄い本を一冊、僕に差し出した。

◆ここで、あなたも考えてみよう

表紙には『決戦食生活工夫集』とあった。昭和十九年に、神奈川県の食糧営団という所が出した本だという。中身を短くまとめると、こうなる。

・米、野菜、魚、調味料のむだをなくす
・燃料のむだをなくす
・ミカンの皮を、むだにせず使う
・日本の各地の郷土食
・学校に持っていく弁当の作り方

「この本は、なぜ作られたのか。中身から考えて、説明して」

僕は、最初、こう言った。

「料理を、上手にするため」

「それなら、ごちそうの作り方が書いてあるはずよね。もう一度、見て」

僕は、まとめを読み直した。ミカンの皮。燃料のむだ。弁当。ごちそうの話は、一つもなかった。

「……これ、全部、足りないものを、どうにかする話だ」

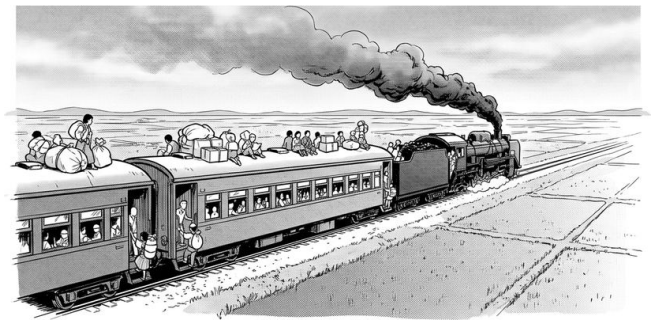
「何が、足りないの?」

「食べ物も、燃やすものも。戦争が長くなって、米も燃料も足りなくなっていた。だから、捨てていたものまで食べられるようにする工夫を、家々に広めようとした」

ミオが、うなずいた。

かまどの火の中で、白い糸が、色を取り戻し始めた。

＊



その色は、半分のところで、止まった。

糸は、もう一つ先の時代へ、僕を運んだ。

汽車の屋根の上だった。

冷たい風が、顔にぶつかってくる。屋根の上には、大きなリュックや風呂敷包みを背負った大人たちが、ぎっしりと座っていた。列車の中は、人でいっぱいで、もう入れないのだ。キヨも、母さんと並んで、屋根のへりにしがみついていた。

昭和二十一年。戦争は終わった。でも、食べ物は、前よりもっと足りなかった。町の人たちは、着物や時計を持って、農村まで食べ物と取りかえに行く。そのために乗る列車を、**買い出し列車**と呼んだ。空襲で線路や車両が傷み、燃料の石炭も足りず、列車は少なく、いつも人でぎゅうぎゅうだった。

「戦争が終わっても、すぐには、食べられるようにはならなかったの」

ミオが、屋根の上で、髪をおさえながら言った。

「何を食べられるかは、その時代のしくみが決める。千年前の贄も、明治の牛鍋も、この列車も、同じ糸よ」

＊

気がつくと、僕は収蔵庫にいた。

年表を見上げた。奈良のあたりから昭和のあたりまで、新しいよこ糸が一本、縫いこまれていた。でも、その糸は、昭和の戦争のあたりで、急に白くなっていた。白いところの端は、ナイフで切ったように、まっすぐだった。

「半分しか、戻らなかった」

つぶやいて、棚のほうを見た。

ガラスのケースの中に、古い帳面が一冊あった。すり切れた表紙に「献立」。札には、じいちゃんの字で、こう書いてあった。

「三坂　戦時中の献立帳　寄贈」

歩の手帳

食の糸の年表

時代	食をめぐって何があったか
飛鳥	天武天皇の肉食禁止令。牛・馬・犬・猿・鶏を、四月から九月まで食べることを禁じる（六七五年）
奈良	各地の産物が、税や贄として都に運ばれる。荷札に木簡を使う
鎌倉	栄西が、茶を飲むことを広める（宋から茶の種を持ち帰ったと伝えられる）。『喫茶養生記』。将軍の源実朝に茶をすすめる
江戸	徳川吉宗が、嶺岡牧（今の千葉県）で白い牛を飼わせ、乳から薬をつくる
明治	天皇が牛肉を食べたことが知らされる（一八七二年）。牛鍋がはやる。仮名垣魯文『安愚楽鍋』。牛乳の配達が始まる
昭和（戦中）	米が配給になり、さつまいもなどの代用食。『決戦食生活工夫集』（一九四四年）
昭和（戦後）	食べ物が足りず、買い出し列車で農村へ。闇市

わかったこと

- 茶も牛乳も牛肉も、最初は「薬」や「えらい人のもの」で、やがてみんなのものになった
- 何を食べられるかは、宗教・外国とのつきあい・戦争など、その時代のしくみが決めた
- 戦争が終わっても、食べ物はすぐには足りるようにならなかった

呼び方の橋

- 牛鍋 ＝ 今の「すき焼き」に近い料理
- 代用食 ＝ 米のかわりに食べた、さつまいも・じゃがいも・小麦粉など

漢字で書けるかな

- 贄　喫茶養生記　牛鍋　代用食
- 買い出し列車

並べかえてみよう（古い順に。答えは本の最後）

- ア　牛鍋がはやる　イ　栄西が茶をすすめる　ウ　牛などを食べることが禁じられる　エ　買い出し列車が走る

手帳のすみに、じいちゃんの字が浮かんだ。

——三坂の食。戦争の年、工場の食堂の釜は、一度も火が消えなかった。

その下の、角ばった字。

——食べた物を覚えて、何になる。

僕は、その字を、しばらくにらんでいた。

白紙の年表 2　よこ糸の巻　試読版

構想編集　川上大樹
筆　Claude
発行　自学自伸教材開発ラボ
試読版　二〇二六年十一月（第二版）

この試読版は、本の第一話から第三話までです。挿絵は、AIで描いたものです。 史実は、資料で確かめたものだけを書いています。お気づきの点は、話数（第○話）を添えてお知らせください。